

---

# テイルズオブエクシリア R

壱岐 鹿目

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テイルズオブエクシリアR

### 【Nコード】

N9568X

### 【作者名】

壱岐 鹿目

### 【あらすじ】

消化不良と呼ばれたテイルズオブエクシリアを綺麗さっぱり終わらせようと作りあげた作品。説明とか結構省くので原作を知らないという意味不明な部分も多いです。

原作と話が少し違ったり、オリキャラが登場したりしますので原作崩壊が嫌な人は注意して下さい。

## キャラ紹介

パーティメンバーの説明は基本コピーです。

ジュード・マティス

年齢：15歳

身長：163cm

CV：代永 翼

本作の主人公。まだ幼さの残る少年だが、医師になるべく、一人故郷を離れ、王都イル・ファンの医学校で学んでいる。現在はインターンとして研修中。賢く冷静で、何事も要領よくこなす優等生だが、物事の割り切りも早い。まどきの子。一方で、お節介ともいえるほどの世話焼きな面もあわせもつ。そのせいで何かとやっかいごとに巻き込まれがち。お人好しである。争いことは好まないが、戦いにおいて優れた集中力を発揮し、仲間のピンチを救う事も多い。自分にはない、特別な使命感を持ったミラに憧れの念を抱き、力になりたいと思うようになる。

ミラ・マクスウェル

年齢：20歳

身長：168cm

CV：沢城 みゆき

本作の主人公。地水火風を司る四大精霊を従え、自らを精霊の主マクスウエルだと名乗る謎の女性。性格は冷静沈着。世界を律する精霊マクスウエルとしての責任感が思考の基準となっており、使命を果たすための行動には一切の迷いが無い。同時に、なすべき事をなそうとしない存在を嫌悪する。精霊としてかなりの英知を持っているものの、人間的な生活能力は皆無。人間やその文化に対する好奇心が旺盛で、ひとたび興味をもつと徹底的に知りたがる。使命に臨む場面以外では、かなり天然かつ、素直である。ジュードと出会い、共に旅をするうちに、少しずつ人間の感情を理解するようになる。

## アルヴィン

年齢：26歳

身長：182cm

CV：杉田 智和

自称「フリーの傭兵」。リーゼ・マクシア各所を渡り歩いてきたと言うだけあり、その腕は確か。誰に対しても気さくでフランクに接し、常に大人らしく余裕ある態度を見せる。勝手気ままに行動しているように見えて、実はかなり計算尽くなところがある。他人の気持ちを敏感に感じとり、相手が望んでいる言葉や行動を選んで返すのが得意。その一方で、自分自身のことは多く語らず、親しげな態度の裏に、本心をうまく隠してしまう。お金で動くと言いながら、ジュードたちに同行するのには、何か目的があるようだが……。

## エリーゼ・ルタス

年齢：12歳

身長：145cm

CV：堀中 優希

12歳という年齢には不相応なほど、高度な精霊術を使いこなす少女。いつも「ティポ」という、しゃべって動く不思議なぬいぐるみを抱えている。特殊な環境で育ったため、対人経験が極端に少なく、会話の距離感をはかるのが苦手。初対面は特にもじもじしてしまうが、それは人馴れしていないだけで、決して人嫌いではない。友達という存在に強い憧れを持っている。そのため、初めて友達だと言ってくれ、広い世界に連れ出してくれたジュードたちに信頼を寄せ、なんとか役に立とうと頑張る。

ローエン・J・イルベルト

年齢：62歳

身長：175cm

CV：麦人

大國ラ・シュガルの高級貴族の一つである、シャール家当主に仕える老執事。どんな時も落ちついていて、丁寧で品のある物腰を崩さない。精霊術を得意とし、一行を力ではなく、経験と作戦でフォローするブレイン的存在であると同時に、緊迫した空気を冗談でさりりと緩めたりする、お茶目なムードメーカーでもある。幅広い知識と、卓越した分析力、状況判断力を持ち、一手先を読むことに長けている。時折垣間見せる鋭い眼光には、普段の柔和な表情からは想像もつかない迫力がある。

レイア・ロランド

年齢：15歳

身長：158cm

CV：早見 沙織

ジュードの幼馴染で、明るく元気、感情表現豊かでさっぱりした性格。家族で営む宿屋の看板娘を務めつつ、ジュードの実家の治療院で、看護師見習いをしている。相手を思いやる優しい心の持ち主だが、そのために気を使いすぎて、悩みを抱え込んでしまうことも。格闘技やスポーツなどの勝負事に目がなく、すぐに盛り上がって熱くなるが、勝ち負けの結果よりも、全力を尽くして努力することが大事だと考えている。失敗して凹んだりしながらも、いつも一生懸命さを失わない頑張り屋さんである。

イバル

年齢：16歳

身長：165cm

CV：森久保 祥太郎

マクスウェルを祀る村で、代々「マクスウェルの巫子<sup>みこ</sup>」を務めている家系の出身。巫子であることに強いプライドを持ち、子どもの頃からずっとミラの世話係として、傍に仕えてきた。ところがジュードの登場によって、世話係のポジションを奪われたと一方的に決め付け、ことあるごとに突っかかっていくようになる。頭は良く、人

並み以上の正義感も持っており、二刀を使いこなす武術の腕もかなりのものだが、短気さとエリート意識のせいで、感情的な行動に走って失敗してしまうことが多い。

ハル・プルート

年齢：20歳

身長：168cm

イメージCV：櫻井 浩美

本作品オリジナルキャラ。自分自身をマクスウエルの敵と名乗る槍使いの女性。漆黒の長い髪に中性的な顔立ちをしている。

精霊の敵と名乗ってジュード達の前に現れ、一度は刃を交えるも、お互いの目的が一致したことにより同行することになる。ミラとは違い世間知らずではないものの、どこかズレている。また方向音痴で、パーティを迷子にすることも多々ある。

## プロローグ

精霊術による文化を基盤として発展した世界、リーゼ・マクシア。そこには人間と多くの魔物、そして遍く精霊たちが存在していた。人間は、脳の「霊力野<sup>ゲート</sup>」と呼ばれる器官から、世界の根源エネルギーである「マナ」を発することができ、マナを糧として生きる精霊は、人間からマナを受け取り、その見返りとして術を発動させる。これが精霊術の仕組みであり、この共生関係こそが、リーゼ・マクシアの文明の根幹を担っていた。

精霊術は、人により得手不得手があるものの、誰もが使える一般技術で、生活の隅々にまで浸透していた。照明を灯すこと、家を建てること、大きな船を動かすこと、全てを行っているのは精霊術である。

しかし精霊の姿そのものは、特別な方法で実体化していない限り、人間の目でとらえることは難しい。

日常的に精霊術の恩恵にあずかっているも、実体化した精霊を見ることは非常に稀である。

そんな精霊たちを、太古から束ねる主は、元素の精霊マクスウエルであると言われている。

「……………精霊が死んだ」

金色の髪をなびかせながら女性は立ち上がる。

「やはり黒匣シムの力かもしれない。確かめる必要があるな」

女性はそのまま建物の扉をゆつくりと開け、外へと出る。その後ろには4体の精霊が姿を見せていた。

「……教……授……？」

少年の目の前には液体の入ったカプセルがあつた。液体以外は何も入っていない。いや、入っていた。“人間”が。中にいた人間はマナを全て吸い取られ、液体が蒸発したように消えていったのだ。少年は呆然としていた。何が起こつたのか理解出来ず、ようやく理解出来たのか数歩後ろに後ずさつた。

「アハ、侵入者つてあんたのこと？」

唐突に背後から声がした。声質からして女性だということは分かった。振り向けば、部屋の上の方に幼い女の子がいた。パツと見ただけなら銀髪に赤い服を来た女の子だ。パツと見ただけなら。だが、右手に持っているものは異常だった。少女の胸の高さまである剣のような物体。見るからに“凶器”だということが分かる。

「見ちゃったんだ」

「君は……」

「その顔、たまんない」

少女は少年のいる下の階まで飛び降りれば、うっとりした表情をした。それは人を魅力させる表情ではなく、恐怖を抱かせるような表情だった。

「絶望していく人間って！」

## 一章「精霊の主」(前書き)

プロローグの時点でかなり進んでしまってますいません。あんまり序盤あんまり変わらないんで、やってしまいました。視点変更して書こうとも思ってたんですが、視点変更するキャラがこの時点でアグリアかアルヴィンしかいなかったの、ジュード視点でのアグリア戦から始めました。未プレイの方は全く意味不明だったと思うんですが、ご了承下さい。

こんな感じで序盤はスキップ率高いんで、気をつけて下さい。これからもスキップすると結構あると思うんで。

それでは1話、ご覧下さい

## 一章「精霊の主」

それは圧倒的だった。少女は持っていた凶器を振り、精霊術を使って少年を追い詰めていった。精霊術を受けて動きが鈍くなった少年を、少女は剣で切るのではなく蹴り始めた。

「アハハハハ！そろそろ死んじやうかもね」

少女は少年の顔のすぐ横に剣を刺して不気味にそう呟いた。

「死……やだ。何か…何かあるはず………」

少年は恐怖を感じた。だが、その目はまだ諦めた目ではなかった。少女はその目がとても気に入らなかったのか、刺していた剣を抜けば振り上げる。

「なぐに……落ち着いてんだよオ！！」

殺される。

そう核心した少年は咄嗟に目を閉じた。しかし一向に痛みが襲ってこないことに違和感を感じ目をゆっくりと開いた。少女は剣を振り上げたまま動いていない。

「……？」

少年が目を閉じると同時に部屋の扉が開いたのだ。扉からは金髪の女性が姿を現した。歳は18〜20歳くらい。ここ、イル・ファンの研究所の地下に入る前に出会った女性だった。

「アハ〜そっか。侵入者ってあんたの方が。つまんないんだ、この子。だからあんたから殺したげる」

少女は剣を地面に刺せば、すぐに精霊術の詠唱を始めた。

「その顔、ぐちゃぐちゃにしてやる!」

「…それは困る」

刹那、女性が呟いた瞬間桁違いの精霊術が発動した。“詠唱なし”  
で。

少女は衝撃で吹き飛び、カプセルに頭をぶつけて倒れた。どうやら火傷も重なって気絶したようだ。

「す、すごい…」

少年は女性の放った精霊術に対して、そう呟いた。女性の方は気絶した少女の首にかけられていたカードのような物を拾う。

「帰れと言ったろう。まさかここが君の家というわけか？」

「違うけど…」

それを聞けば女性はカプセルの方に目を向けた。ハウスの入っていたカプセル以外にも7つ程あり、それぞれに人が入っている。ただびっくりともしない辺り死んでいるのかもしれない。

「これが黒匣の影響……？微精霊たちが消えたのに関係している？」

「黒匣…？」

「君は早く去るといい。次も助かるという保証はないのだから。黒

匣は……どこか別の場所か」

女性はそう少年に告げれば部屋を出ようと扉の方を振り向き、歩きます。

「ね、ねえ待って。…あてがないんだ。教授と一緒にならここから出れたかもしれないけど」

少年はその場を離れようとする女性を呼び止める。

「僕も、行っている？」

それを聞いた女性は笑みを零しながら少年の方へ振り向いた。少年の目を真っ直ぐ見つめれば、

「成る程、確かにそれなら次も助かるだろう。君は面白いな」

「ジュード・マティス、それが僕の名前。君は？」

「私はミラ。ミラ＝マクスウェルだ」

ジュードはミラと名乗る女性に連れられ、さつきとは違う部屋に入る。中は暗く、大きな黒い影が一つあること以外何も分からなかった。

「やはりか…」

ミラは齒ぎしりをしながら、“それ”を眺めている。普通の民家。少なくともジュードの住んでいた家よりも大きな“それ”の存在が近づくことによってようやくきちんと目視出来た。

「何、これ……」

「黒匣<sup>ジン</sup>の兵器だ」

ジュードはミラの言う黒匣<sup>ジン</sup>というものがどんな物か理解が出来なかった。目の前にある兵器はまがましい形をしており、まるで巨大な砲台のようだった。ジュードは呆然としているミラの横を通り抜け、恐る恐る黒匣<sup>ジン</sup>の兵器に近づいた。機械を操作すると、そこにはこう表示された。

「クルスニクの槍……。創世記の賢者の名前だね」

「ふん。クルスニクを冠するとは、これが人の皮肉というものか」

ジュードが振り向けば、ミラは上下左右に大きな陣を展開していた。それが精霊術だということは分かったのだが、ジュードの知っているような精霊術ではなかった。

同時にミラの周りに幻のような存在が4つ現れた。まるで精霊のような。

「やるぞ、人と精霊に害為すこれを破壊する！」

言葉と同時に精霊のような存在はクルスニクの槍に向けて飛び立つ。

「ミラは本当に、精霊マクスウエル…？」

出会い頭にミラが自分が精霊の主マクスウエルであると言っていた。だがジュードはそれを冗談と受け取っていたが、冗談ではなかった。ミラの言葉と同時に現れた幻のような存在は明らかに大精霊だったのだから。

ジュードは慌ててクルスニクの槍に目を向ける。そのすぐそばに誰かがいるのに気付く。銀髪に赤い服を着た少女。先程ミラに撃退された少女だった。

「許さない……うっざいんだよオ！」

少女はすぐそばにあったクルスニクの槍の制御盤のようなものを動かし始めた。するとそれに反応して黒匣<sup>ツツ</sup>の兵器が動きだす。

「マ、マナが……抜け、る………」

ジュードは自分の体内のマナが抜けだしたことから、兵器がこの周辺にある全てのマナを吸い取りだすものだとして理解した。だが理解しただけで打開策は全く思いつかなかった。ミラもマナが抜けているのか、膝をつく。

「正気、か？お前…も、ただでは………すまないんだ、ぞ？」

「アハハハハ、苦しめ。死んじゃえ………」

少女は苦しそうな表情でその場に倒れ伏せた。どうやら彼女も例外ではなくマナを抜き取られたようだ。

「く………」

ミラはマナが抜けていく状態でクルスニクの槍に向けて歩きだす。

「くの、く………」

ミラが装置の何かに触れた瞬間、バチンと嫌な音が部屋に響く。同時にミラは扉付近に吹き飛ばされた。その衝撃で床が崩れていく。ミラの右手には円盤のようなものが持たれており、左手をかざして大精霊を呼ぶ。しかし反応がない。

「な………!?!」

ミラはそのまま床と共に落ちていく。ジュードは身を乗り出し、ミラを追うように自分も落下していく。

「!!!ミラああッ!?!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9568x/>

---

テイルズオブエクシリアR

2011年11月1日02時17分発行